

M氏ノ運転シタ風景ノ記憶 ⑫

「がはは、正義やんは人の話をあんまり聞かねえがらなあ」

と父の運転士仲間が言った。今日は無礼講の日で一年に三回ぐらいの家での宴会である。

四・五人の国鉄の運転士達が休みを取って集まっていた。

日本酒を競うように飲んでゐる。昔、蒸気機関車の石炭運びなどの力仕事をしていたせいか

胸板が厚くて全員が力自慢、そして酒を飲む量も半端じゃ無い。朝方になると玄関先まで

日本酒の匂いが残るぐらいすごいのだ。そして酒に酔うと、声が大きくなり、歌まで歌う始末。

甚だ迷惑な日だったが不思議と運転士の宴会が嫌では無かった。それどころか

(何でこんなに楽しそうなんだろう)と、羨ましかった。そして

(この人達が、あの長い列車をいつも一人で運転すんだなあ)と頼もしく思った。

「ブレーキよし。」と運転士は確認の声を出した。そして様々な計器類も確認。

前方に障害物が無いのを見て、信号が青になるのを待っている。

信号が変わると、静かに機関車を動かして貨車達に連結させた。

これから目的の駅へ到着するまで二時間、集中心を切らせてはいけない。

トイレなど、もつての他だ。もう一度念のため運行表を一通り確認する。

そして本線の信号は青になった。

「出発進行・・・」の声と共に、長い貨物列車を出発させた。

父はいつも言っていた。

「目的地に無事着けたなら、その運転は百点、上手も下手も無い」と。